

K-POPの系譜 (1)

金 成 政



きむ・そんみん 1976年ソウル生まれ。北海道大学准教授。専門は文化社会学。著書に「戦後韓国と日本文化」「K-POP 新感覚のメディア」など。日韓を中心にポピュラー音楽やメディア・都市文化を研究する。

今や世界中にファンを持つK-POP。グローバルに受け入れられる普遍性のように生まれたのか。北海道大学の金成政准教授が解説する。



米ビルボード音楽賞で4冠を獲得し、新曲「Butter」を披露した(5月23日) =NBC提供・AP

経験や感情ファンと共有

まさに2020年代初頭のポップスを象徴する存在といえよう。

音楽産業変える
米ビルボード音楽賞で4冠を達成し、新曲「Butter」で数々の記録を塗り替えているその影響力

は、音楽産業の構造変動にまで及んでいる。BTSの所属事務所「HYBE」が、米メディア企業「イサカ・ホールディングス」の買収を発表し、ユニバーサル・ミュージック・グループ(UMG)とパートナーシップを結んだのもその一つ。BTSの成功を機に、米韓の音楽・メディア業界が互いを通じてさらなるグローバル化をはかっているのだ。

K-POPとは、1990年代、韓国のポップスが世界のトレンドとスタイ

にダイレクトに届いていったのである。

PSY「江南スタイル」のメガヒットを経てK-POPの世界市場が定着し始めた頃の13年にデビューしたBTSは、音楽的にはソテジワイドウル(デビューは1992年)とBIGBANG(同2006年)のヒットホップを受け継ぎつつ、既存の成功事例や戦略に縛られることなく、それまでの「K」の枠を超える音楽的成功を成し遂げてきた。

多様性と普遍性
その核心にあるのは、差異と多様性を前提にした普遍性を共有する音楽コ

夕刊文化

作家 松山 巖 (3)

6枚の絵皿がある。2つの山が連なる姿が深い緑色で描かれている。

この絵皿は、日本画家で特に美人画の名手として知られる伊東深水が、自らの結婚式に引き出物として供したらしい。式に参列した私の父が、受け取ってきたものである。

しかも皿の絵は、深水自身が描いたと私は教えられてきた。ただし、父が出席した結婚式は、深水の娘としてよく知られる朝丘雪路の母親との結婚ではなく、

それ以前の、最初の奥さんとの宴である。

私は我が家で友人たちが集まり、共に酒をのんだ時に、兄の家から、この6枚の皿を借り、返さぬまま今も所持し、しかも不注意にも、皿が納められていた木箱を捨ててしまった。木箱には作り手の名などが記載され、重要だと私は知らなかったのである。

では、何故、父が深水の結婚式に呼ばれたのか。これも実はよくわからない。ただあえて推理すれば、

実家との意外な縁結び

からか出郷し、森下町辺りに住み着いたのだらう。

一方、深水は我が家の墓地のある町に、明治31年に生まれ、明治40年(1907年)に小学3年で中退し、看板屋や工場従業員となり、更に活字工となって働き、ようやく日本画も学び始めている。大変な努力家だ。

祖父と深水が、どのように知り合ったのかはわからない。それでも同じ町に生活し、自分も職人として学び出した祖父は、近くに篤実な少年がいて、彼の努力を知り、色々励まし、少しの援助もしたのではないだろうか。そして名を上げた深水は、愛宕で石屋を営んでいる我が家に時折、挨拶に来たのではないかと推測される。

深水が結婚した年は米騒動とシベリア出兵が起きた翌年で、大正デモクラシーが芽生えた明らかな時代だ。それだけに父は、深水の結婚式に招かれた記憶を大事にし、6枚の絵皿を大切な宝物にしたに違いない。

こころの玉手箱

伊東深水の絵皿

連なる2つの山が深い緑で描かれている

作家 松山 巖 (3)

6枚の絵皿がある。2つの山が連なる姿が深い緑色で描かれている。

この絵皿は、日本画家で特に美人画の名手として知られる伊東深水が、自らの結婚式に引き出物として供したらしい。式に参列した私の父が、受け取ってきたものである。

しかも皿の絵は、深水自身が描いたと私は教えられてきた。ただし、父が出席した結婚式は、深水の娘としてよく知られる朝丘雪路の母親との結婚ではなく、

それ以前の、最初の奥さんとの宴である。

私は我が家で友人たちが集まり、共に酒をのんだ時に、兄の家から、この6枚の皿を借り、返さぬまま今も所持し、しかも不注意にも、皿が納められていた木箱を捨ててしまった。木箱には作り手の名などが記載され、重要だと私は知らなかったのである。

では、何故、父が深水の結婚式に呼ばれたのか。これも実はよくわからない。ただあえて推理すれば、

三島賞「旅する練習」構造が高評価

純文学が対象の第34回三島由紀夫賞は、乗代雄介(34、写真⑤)の「旅する練習」(講談社)に決まった。登場人物の修業中の文章と回想で織りなす物語の構造の完成度が高く評価された。一方、エンターテインメント小説が対象の山本周五郎賞は佐藤賢(43、同⑥)の「テスカトリポカ」(KADOKAWA)が選ばれた。メキシコや日本が舞台の犯罪小説で、緊密な文体が評価された。

「旅する練習」は、小説家である「私」が、サッカー好きで中学入学前の姪と利根川沿いを歩き、Jリーグ、鹿島アントラーズの本拠地を目指す数日間の物語だ。「私」は文章で旅先の風景を描写し、姪はリフティングを練習する。「私」による後日の回想と、道中で記した文章を軸に展開する。

選考委員の川上未映子によると「評価は」構造の完成度の高さに集まった。乗代も「かなり手の込んだことをしないと成立しない。構造には気を使った」と手応えを語る。

「テスカトリポカ」は、かつて麻薬カルテルに君臨した密売人に見いだされ、臓器売買ビジネスに巻き込まれる孤独な少年が登場する。過激な暴力描写に加えて、アステカ文明の神話的要素が印象的だ。「発想の豊かさ、リサーチの徹底ぶり、緊密な文体」(選考委員の江國香織)が賞につながった。

佐藤は2004年に別名義の純文学作品でデビュー。日の目を見ない時期もあったが、エンタメ作品では江戸川乱歩賞、吉川英治文学新人賞と受賞が相次ぐ。それでも佐藤は「純文学を捨てた意識はない」と強調する。文学賞では敬遠されがちなバイオレンス作品でもある。「(選考委員の)懐の深さに感謝したい」と喜んだ。



「旅する練習」の著者乗代雄介(左)と選考委員の川上未映子(右)。

NODA・MAP「フェイクスピア」



主演の高橋一生＝篠山 紀信撮影

イヌやカーテンを用いるだけで驚くべき世界が現れる。演劇というアナログ表現の凄みを感じさせる野田秀樹(作・演出)の新作である。

人々がイタコの口から死者の声を聞く恐山が舞台だ。白石加代子のイタコ見習いのもとに吹き寄せられるのは、アラハムやら星の王子様やらシェイクスピアならぬフェイクスピアやら。ふたりの男、高橋一生のmonoと橋爪功の楽は記憶を失っている。命の枯れた森で息を吹き返したらしいmonoは不思議な箱をもち、謎の言葉を発しつつさまよう。ギリシャ悲劇のクロス(合唱隊のようなカラス集団も乱入、シェイクスピア劇のパロディも交え、

閉塞状況に応答する言葉

箴言を納めた箱の争奪戦が繰り広げられる。人生に絶望する楽へmonoが伝えようとした箱の中の言葉とは……。

塔のある傾斜地で布のカーテンが横切るときに場面が変わり、人が変身する。風車やカラスは恐山のイメージ。ポップな舞台に知的意匠をちりばめるのはいつもながら、折口信夫の「死者の書」や夢幻能を思わせる作劇だ。

終盤 野田演出と井手茂太の振り付けとが、圧倒的場面をつくる。夢つつつの場合は、旅客機が制御を失い山に急接近する時間を引き寄せる。イヌが滑り、乗務員のつかむパイプが揺れる。パイロットの本体をあらわすmonoの末期の声にみみぎる生きる意志。高橋一生のトーンがいい。

「はじめに言葉ありき」の言葉のドラマ、演劇的な詩だ。森に残った最後の一葉がマコトノハ(真の言葉)になり、フェイク(にせの言葉)を打ち破る。旧作「し」でも引かれた実録の言葉が、コロナ禍の閉塞状況に応答する。大詰めの橋爪のせりふが抜群。7月11日まで、東京芸術劇場。(編集委員 内田洋一)

インタビュー旅行 (121)

萩原 浩
タケウマ 画

III. どつすれば元の世界へ戻れるだろう 42

男が私に憎々しげな視線を向けてくる。私を犯罪者か何かだと思っているような目つきだった。「はずせよ」

感情的な物言いには、こちらも感情的になる。確かにこっちの世界にはコロナは存在しない。私の世界と違ってマスクをする習慣も少ないようだが、なぜそんなことを言われなくちゃならないんだ。むきになって言い返した。

「なぜです。あなたに迷惑をかけてますか」

別の所から声があがった。

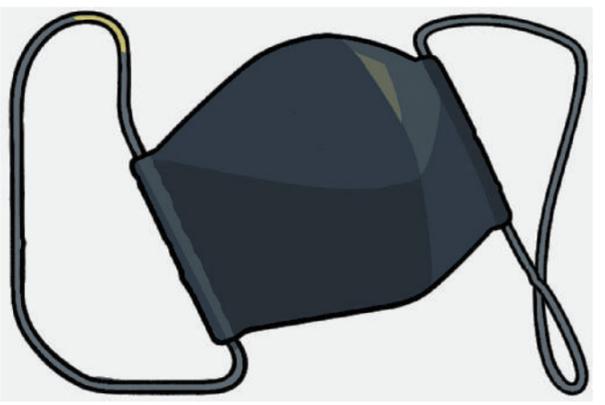
「おいおい」

こちらは若いサラリーマンの声。朝っぱらの言い争いにあきれているのだろうと思ったら、違った。「さっさとはずせよ」

前髪きっちり男が吐き捨てる。

「なぜもへちまもねえよ、キョーギュービョーなのか、お前は？」

周囲の人間たちがいっせいに頷いたように見えた。人垣のさらに外側、ドアの近くにいた二人連れの女性が二人揃って私を軽蔑のまなざしで見ている。



どうしてこの世界では、誰もマスクをしないのだろう。マスクを忌み嫌っているようにさえ思えるのはなぜなのか。他の車両に乗り換えて、くしやみを堪えながらスマホで検索しはじめたのだが、すぐにやめた。

読みはじめた記事がごとくくならんかの広告であることに途中になって気づくのだ。おおかたが大神光教に勧誘するためのものだった。

『マスク しない理由』で検索し、もっともらしい理由をふむむと読んでいううちに、「マスクのない社会をつくったのは大神光教」などという主張と、賛同する大量のコメントに行き着いてしまう。『マスクなし 経緯』で調べたら、『マスクなしの世界に挑んだ男』王原光太郎「大神光教祖の書いた本の広告が延々と続いた。この世界のネットのよけいなお世話のパーソナライズは、私のいた世界以上にひどい。」